

コロナワクチン接種

流行収束への希望となる

山本 太郎 長崎大教授

やまもと・たろう 1964年
 年広島県生まれ。長崎大卒。ア
 フリカや中米で感染症対策に従
 事。専門は国際保健学、熱帯感
 染症学。



反応のデメリットを考える必要があるが、みんなが免疫を持つことで、安定的な集団免疫水準を維持できるようになる。

そうした社会で新型コロナウイルスはどのような感染症になっていくだろうか。考えられるのが、比較的穏やかな風邪の症状を起こすウイルスとして人間の間に着定することだ。

その際に気になるのがウイルスの変異株だ。ワクチンが体に作らせる「中和抗体」はウイルスにくっついて感染を防ぐ。これまでの知見からすると、従来株のワクチンが誘導した中和抗体は変異株にも部分的に有効と考えるのが妥当だ。将来にわたって変異株に有効とは限らないが、現時点では有効性を裏付ける研究結果も出つつある。

おそらく10年後の世界では、多くの人が小児期に自然感染かワクチン接種によって新型コロナウイルスの免疫を獲得するようになっていくと思う。人々は成長するうちに変異したウイルスに感染するが、過去の免疫が部分的に働いて重症化の危険性は低くなる。

その時には新型コロナウイルスは「新型」ではなくなっているだろう。従来の風邪の症状の10〜15%は人に感染する「ヒトコロナウイルス」のうち4種類が引き起こすと考えられている。健康な人なら重症化することはほとんどない。

人類史と感染症の関係を考えれば、こうした風邪のコロナも、かつて野生動物から人間社会に持ち込まれ、長い間に定着したと考えられる。長期的に人類は新型コロナウイルスとも穏やかな「共存」状態へと入っていく。こうした営みは今後も繰り返されるだろう。

ワクチンには副反応が必ずある。集団で見れば100万分の1か10000万分の1の確率かもしれないが、副反応が起きた人にとつては1分の1の話だ。そうした小さくても大切な物語に私たちは寄り添う必要がある。それでもワクチン接種を進める理由は、それが個人の利益になり、ひいては社会の利益にかなうからだ。

東京と大阪で新型コロナウイルスの大規模ワクチン接種が始まった。長期化するパンデミックは重症化して命を失う人や、経済的に困窮して生活が破綻する人を生み出している。新型コロナウイルスに対する「集団免疫」を獲得し、早く流行を収束させるためにも、幅広い層へのワクチン接種は大きな希望となる。

国内流行は「第4波」のただ中にある。ワクチンが多くの人に行き渡るまでは、流行の波をできるだけ小さく抑えることが喫緊の課題だ。国民には引き続き感染対策と慎重な行動が求められる。

世界に目を向けると、接種で先行する米国や英国、人口の半数以上が2回の接種を終えたイスラエルでは新規感染者数が減少し、収束に向けた動きが出てきたように見える。これは集団免疫が確立されてきたからだ。

ただ集団免疫ができて、ワクチンが不要になるわけではない。新たに社会に加わる新生児は新型コロナウイルスの免疫を持たない。そのまま成長すると自分が感染して発症したり、他人にうつしたりする可能性がある。

これを防ぐには子どもへのワクチン接種が今後の課題となるだろう。社会や個人へのメリットと副